

## エンカウンター・グループ相互作用評定スケールを用いたプロセス研究 — 効果との関連から —

A Process Study of Basic Encounter Group  
by means of the Basic Encounter Group Interaction Manner Scale.  
— Relationship between Group/Member Process and the Its Outcome —

坂 中 正 義

(Masayoshi SAKANAKA)

福岡教育大学教育学部

学校教育講座心理学研究室

(平成11年9月10日受理)

### Abstract

The purpose of the study is to analyze relationship between group/member process in Basic Encounter Group and the its outcome from the experiencing point of view. The author investigated the changing process of 3 groups. Process variable was score rated by the Basic Encounter Group Interaction Manner Scale (Sakanaka, 1998). Outcome variables were level of Group Development and degree of member's psychological growth rated by clinical psychologists.

The findings were as follows.

1. To be fully developed level of group process, it needs to basically keep group's atmosphere acceptably, familiarly and freely. Further, each members needed to be able to speak actively, respect and facilitate each other's experiencing.

2. To be fully grew degree of member's psychological growth, member needs to experinece awareness and shift in group, and get the manner of understanding human and empathy, in encounter with other members in sessions,

Key Words : Basic Encounter Group, Experiencing, interaction, process study, outcome study

### 要 約

本研究の目的は、体験過程の視点からみたエンカウンター・グループでの相互作用と効果との関連を検討することである。プロセス変数は、坂中（1998）で作成した「エンカウンター・グループ相互作用様式評定スケール」を用いた。効果変数は「グループ展開度」「臨床家による心理的成長度評定」を用いた。対象は3グループだった。

プロセス分析の結果、次のようなことが示唆された。

(1) グループが十分に展開するには、グループが基本的に、受容的で親密で自由な雰囲気を保っているか、その上で、活発に発言がなされ、お互いの体験過程を尊重し、促進できるかに関係している。

(2) メンバーが心理的に成長するには、グループ内で何らかの気づきや開けを体験するとともに、セッション内で、積極的に他者に関わりながら、他者理解の仕方や共感性を養っているかどうかに関係している。

キーワード：ベーシック・エンカウンター・グループ、体験過程、相互作用、プロセス研究、効果研究

## I. 問題と目的

わが国にエンカウンター・グループ（以下、EG）が導入されて以来、多くのリサーチが行われてきた（村山・野島・安倍・岩井，1979等）。最近の主なリサーチは、坂中・村山（1993）に紹介されているが、いくつかの研究では、EGの効果として、メンバーの体験過程の促進を挙げている。

例えば、村山・樋口（1987）は、メンバーの発言に Klein, Mathieu, Gendlin, Kiesler（1970）の体験過程スケールを適用し、グループ・プロセス、個人プロセス共に体験過程の促進を確認した。

また、坂中（1994）は、「エンカウンターグループ発言カゴテリー」を作成、事例に適用した結果、「グループ内での感情・感じの自己開示」や「今ここで」発言などの増加がみられことから、メンバーの体験過程の促進を示唆した。このカゴテリーを用いた大塚（1999）でも、ほぼ同様の結果を得ている。

しかし、これらの研究は、話し手としてのメンバーの体験過程の促進に言及しているだけで、どのような要因でそれがなされるのかといった検討はされていない。

個人療法の研究では、クライアントの体験過程の促進をカウンセラーとの相互作用から明らかにしようとする試みがある。例えば、吉良・田村・岩重・大石・村山（1992）は、ロジャースのグロリアとの面接を、クライアント用体験過程スケールとセラピスト用体験過程スケールを用いて相互作用を分析している。

EGでも、メンバー間（ファシリテーターも含む）の相互作用の中で体験過程の促進がなされるであろう。このことを明らかにするためには、話

し手の体験過程の促進だけでなく、聴き手としてのメンバーの話し手との関わり方にも焦点を当てる必要がある。

そこで筆者は、坂中（1998）において、体験過程の視点からみたEGでの相互作用を分析するため、「エンカウンター・グループ相互作用様式評定スケール（以下、EGIMS）」を作成し、基礎的なプロセス分析を行った。その結果、メンバーは、セッション進行に伴い、自分の体験過程と同様に他者の体験過程も重視し、お互いの体験過程を尊重した態度に変わってくることを示した。

本研究では、体験過程の視点からみたEGでの相互作用の実際をさらに明確にするため、坂中（1998）では検討されなかった、EGの効果と相互作用との関連を明らかにすることを目的とする<sup>注1</sup>。

## II. 方 法

**対象** パーソン・センタードの立場にたつカウンセリング研究所や研究会の主催で一般対象にメンバーが募集されたベーシック・エンカウンター・グループの3グループ。いずれも3泊4日以上以上の日程で、1.5時間～4時間のセッションが10セッション～11セッション、計26～31時間のセッションが行われた。全メンバー数は35名。年齢は20代～60代、職業は、教師、看護婦、会社員、主婦、大学生など多岐にわたった（著者はすべてのグループにメンバーとして参加した）。

**記録** 3グループとも、セッションをテープに録音した。但し、メンバーが録音を拒否した場合は録音を中止した。録音率は54%，78%，73%となった。また、各セッションの様子、話題、雰囲気等を筆者によってノートに記録した。

TABLE 1 エンカウンター・グループ相互作用様式評定スケールの概要

下位スケール	内容
D-scale	話し手が自分をどんなふうに語るかという自己開示や自己探究、自己との出会いの様式を測定する。（クライアント用体験過程スケール）
L-scale	聴き手が話し手のどこに焦点をあてて話を聴いているかという話の聴き方の様式を測定する。（セラピスト用体験過程スケール）
F-scale	話し手やグループに対して、聴き手がどのような感想の持ち方をするかという他者への感じ方の様式を測定する。

注1 これは、EGIMSの妥当性の検討といった意味も含まれている。

**プロセス変数** 対象グループを坂中（1998）の EGIMS を用いて分析した。これは体験過程の視点から EG での相互作用を分析するためのスケールである。ディスクロージャー・スケール（以下、D-scale）、リスニング・スケール（以下、L-scale）、フィードバック・スケール（以下、F-scale）の3つの下位尺度からなり、それぞれ7段階、7段階、5段階で評定する（各スケールの概要はTABLE 1を参照）。発言は、どの下位スケールを適用するか選択することで相互作用の種類を、各スケールにおける段階を評定することで発言様式を測定する。

本研究での具体的な分析方法は以下の通りである。

野島（1982）を参考にして、全セッションを初期（#1<sup>注2</sup> - #5）、中期（#6 - # [最終セッション-1]）、終期（最終セッション）の3期に区分した。この区分に従い、評定素材を作成した。各グループの録音テープからTABLE 2のようにサンプリングした（録音の不備やセッションの運営等の事情で各グループでサンプリングされたセッションが若干異なる）。各セッションからは、3セグメントサンプリングした。1セグメントを5分とし、各セッションの開始から15分経過した時点で1セグメント、そこから30分経過した時点でまた1セグメント、さらに30分経過した時点で1セグメント、サンプリングした。ただし、当該箇所の沈黙が長く、十分な発言数が得られない場合には、沈黙終了時から1セグメントとした。

以上の手続きにより、各グループから6（初期）+ 6（中期）+ 3（終期）の計15セグメントがサンプリングされ、各グループごとに1本のテープに編集された。

**効果変数** 本研究では効果変数を「グループ展開度」「メンバー成長度」とした。この2点を設定した理由は、グループの効果とメンバーの効果は必ずしも一致しないと考えられたからである。

TABLE 2 サンプリングについて

	初期		中期		終期
1グループ	#4	#5	#7	#9	#10
2グループ	#3	#5	#7	#10	#11
3グループ	#3	#5	#7	#10	#11

グループが十分に展開したとしても、メンバー全員が同様に成長しているわけではない。逆もまた真である。

「グループ展開度」については、録音テープ、ならびにグループの記録を検討し、3グループ中、十分に展開したグループ（以下、HDG）と十分に展開しなかったグループ（以下、LDG）各1グループが筆者によって選択された。

「メンバー成長度」については「臨床家による心理的成長度評定」を用いた。従来、EGの効果測定には、村山・山田・峰松・冷川・亀石（1984）による自己実現スケール（以下、SEAS）が使われてきた。しかし、申（1989）は、EG終了直後に参加者が記入した参加者カードより、EG臨床家3名が行った成長度評定とSEAS得点との関連を検討したところ、両者の間に一義的な対応関係は認められなかったと報告、臨床家評定とSEASで測定している内容のずれを指摘し、SEASでEGの効果測定することへの問題提起をしている。この主張より、筆者も臨床家評定を成長度の指標とした。ただし、申（1989）の追試としてSEASと評定の関連も検討した。

「臨床家による心理的成長度評定」には、EG前後でメンバーに参加動機や感想を自由記述で回答を求めた参加者カード、及び体験レポートを資料として用いた。グループ体験のある臨床家3名（筆者を含む、4年、5年、7年）が独立で各メンバーの心理的成長度を評定した。評定は「非常に+に成長した」から「非常に-に成長した」の7段階で行い、メンバーの心理的成長度得点は評定者3名の平均点とした。

SEASについては、メンバーにEG参加前とEG参加後の2回、記入を依頼した。

### Ⅲ. 結 果

#### 効果の検討

**グループ展開度** 対象の3グループのうち、HDGは、「村山・野島（1977）のEG発展段階仮説・段階4以上まで展開したこと」「何人かのメンバーに自分自身への深い気づきが起きたこと」「メンバーの自己探究に他のメンバーが援助的に関わっていたこと」「グループの雰囲気を受容的であり、まとまりや連帯感ができていたこと」などを根拠として選択された。LDGは「村山・野島（1977）のEG発展段階仮説・段階4以上まで一端は到達

注2 第1セッションを#1と表記している。

したが、メンバーのずっと持っていた不満が終期に表現され、最終的には段階3で終わってしまったこと」「グループの親密感は見られたが、連帯感や受容の雰囲気にはやや欠けていたこと」などを根拠として選択された。この選択が妥当であるかを、グループ経験7年の心理臨床家1名に確認を求めた。選択結果は支持された。メンバー数は、HDG=11名、LDG=12名、計23名であった。

**臨床家による心理的成長度評定** 対象メンバー35名中、成長度評定の資料が得られた17名を対象とした。評定値の信頼性をGuilford (1954) のEbel's interclass methodにより算出したところ、 $r_{kk}=0.76$ 、 $r_{ll}=0.52$ であった。この評定では3名の評定値の平均値を用いることから、信頼性係数 $r_{kk}=0.76$ となる。

評定値の基本統計量は平均=5.37、標準偏差=0.73、最低値=4.00、最高値=6.67であった。ーに成長したメンバーは見られなかった。平均よりも心理的成長度得点が高いメンバーを高成長者(以下、HL)とした。HLは7名、HL心理的成長度平均=6.10、標準偏差=0.42だった。平均よりも心理的成長度得点が高いメンバーを低成長者(以下、LL)とした。LLは10名、LL心理的成長度平均=4.87、標準偏差=0.36だった。

この評定値の意味を明確にするため「評定者がEGの効果をどう考えているか」「評定者がもっていた心理的成長度の指標」について検討した。前

者は、TABLE 3のように大きく分けて「自己理解・気づき」「他者理解・出会い」「自己受容・他者受容」の3つであった。後者は、TABLE 4のように「活き活きとした体験記述」「メンバーへの体験的な感想」「対人関係面での気づき」の3つであり、「活き活きとした体験記述」は全評定者が指標としていた。

### プロセス分析

**発言頻度による分析** 発言頻度が下位スケール、各効果変数によって変化するかをみるため、以下の3要因の分散分析を行った<sup>注3</sup>。

- (1) グループ展開度 (HDG・LDG)×グループ・プロセス (初期・中期・終期)×スケール (D-scale・L-scale・F-scale)
- (2) メンバー成長度 (HL・LL)×グループ・プロセス (初期・中期・終期)×スケール (D-scale・L-scale・F-scale)

分析結果をまとめて、TABLE 5に示した。

- (1) については、グループ展開度の主効果なし ( $F=0.00$ , ns), グループ・プロセスの主効果なし ( $F=0.77$ , ns), スケールの主効果あり ( $F=5.06$ , 5%), グループ展開度とグループ・プロセスの交互作用あり ( $F=3.72$ , 5%), グループ展開度とスケールの交互作用なし ( $F=0.55$ , ns), グループ・プロセスとスケールの交互作用なし ( $F=0.97$ , ns), グループの展開度とグループ・

TABLE 3 エンカウンター・グループの効果について

効果	内容
自己理解・気づき (感じに触れる)	自分についての気づきや理解に深まりが起こる。特に、「今ここで」の体験の中で自分の感情・感じを味わい、把握できるようになる。他のメンバーとの関係の中で、自分が何を感じ、どういう関わり方(在り方)をするのかということに気づくことができる。
他者理解・出会い	自分についてと同様に、他のメンバーについても理解を深めることができる。具体的にはメンバーに対して、自由に印象・感想を持ちたり、関わったりすることでメンバーへの理解が深まり、近づく・出会うという体験が起きる。
自己受容・他者受容 (ありのままにいられる ありのままを認める)	自分は自分でしかなく、それでよいと感じることができる。他のメンバーと一緒にいて自分自身そのままだったり、自分を表現してもいいということを体験する。また、それが自分だけでなく他のメンバーもそのままよいということを体験する。これに関連して、人の話を聴くときには聴け、話したいときには話せるということを経験できるようになる。

注3 終期における発言頻度はサンプリングの関係から2倍にして分析した。

TABLE 4 心理的成長度評定の指標

指標	内容
生き生きとした 体験記述	体験についての生き生きとした記述や、自分について何か気づきがかかれていいる。ただし、その記述が自分の言葉を使っているか（実感をともなっているか・具体的か・言葉を選ぶのに苦労、または努力している感じがあるか：知的な理解や気づきは、同時に体験的な記述がなされていないと成長度は低い）、変化体験が十分に概念化されている（＝言語化されている）かどうか、その体験がその人にとって、どれほど重要で新鮮であったかなどが留意されていた。
メンバーへの 体験的な感想	他のメンバーについての感想は、その人なりの体験的な意味が付与されているかが留意されていた。
対人関係面での 気づき	自分自身の対人関係の特徴についての気づきがあるかが留意されていた。

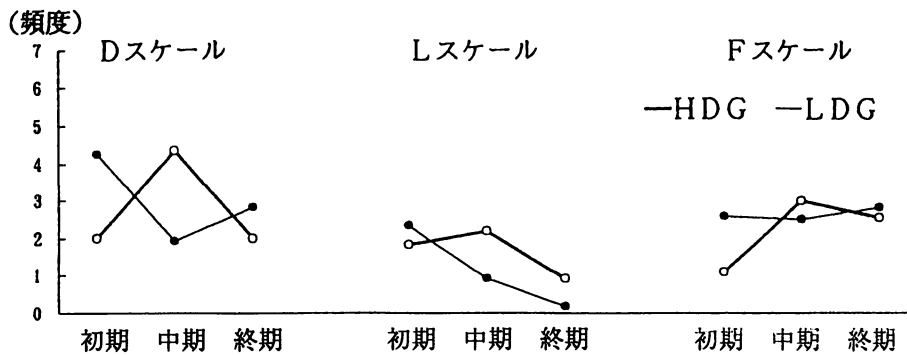


FIGURE 1 グループ展開度別の平均発言頻度

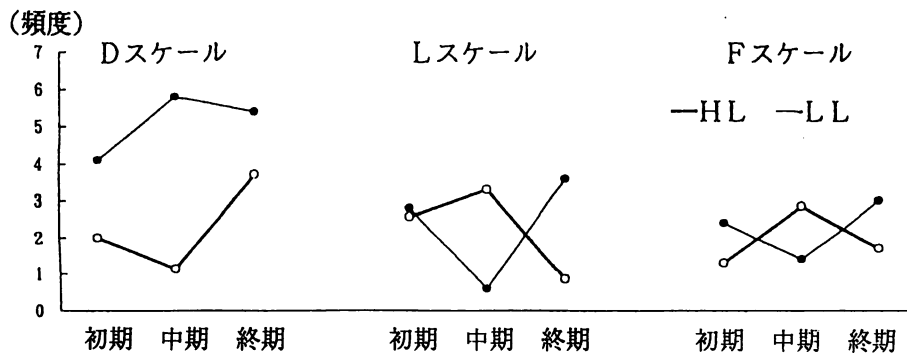


FIGURE 2 メンバー成長度別の平均発言頻度

TABLE 5 発言頻度の分散分析 (数値はF値)

要因 A	HDG/LDG	HL/LL
A : ※	0.00	1.23
B : グループ・プロセス	0.77	0.20
C : スケール	5.06 *	2.22
A × B	3.72 *	0.40
A × C	0.55	1.67
B × C	0.97	0.27
A × B × C	0.53	1.28

\*:  $p < 0.05$ 

プロセスとスケールの交互作用なし ( $F=0.53$ , ns) という結果を得た。各水準での平均の推移を FIGURE 1 に示した。

有意差のあった項目の下位検定を行うと、スケールの主効果では、D-scale > L-scale, グループの展開度とグループ・プロセスの交互作用では、HDG において初期 < 中期がみられた。

(2) については、メンバー成長度の主効果なし ( $F=1.23$ , ns), グループ・プロセスの主効果なし ( $F=0.20$ , ns), スケールの主効果なし ( $F=2.22$ , ns), メンバー成長度とグループ・プロセスの交互作用なし ( $F=0.40$ , ns), メンバー成長度とスケールの交互作用なし ( $F=1.67$ , ns), グループ・プロセスとスケールの交互作用なし ( $F=0.27$ , ns), メンバー成長度とグループ・プロセスとスケールの交互作用なし ( $F=1.28$ , ns) という結果を得た。各水準での平均の推移を FIGURE 2 に示した。

**評定値による分析** 次に、各下位スケールの評定値が各効果変数によって変化するかを検討するため、以下の2点からグラフを作成した (欠損値が多く、分散分析は不可能であった)。

- (1) 各スケールごとのグループ展開度 (HDG・LDG) × グループ・プロセス (初期・中期・終期)
- (2) 各スケールごとのメンバー成長度 (HL・LL) × グループ・プロセス (初期・中期・終期)

なお、従属変数に用いるのは、各メンバーの各スケールにおける平均評定値 (以下, M値), ならびにピーク値 (以下, P値) とする。P値とは、各メンバーの発言につけられた最も高い評定値である。これは坂中 (1998) で述べられているとおり、各スケールの高レベルに評定される発言が1度でもなされるとそれが持続しなくても発言者にとっての意味は深いと考えられるからである。

まず (1) の結果を、スケール別にみていく。

D-scale は FIGURE 3 のような結果を得た。従属変数にM値を用いた場合、HDG と LDG の違いは殆どみられなかった。ともに初期から中期にかけて評定値が上昇していた。

従属変数にP値を用いた場合、初期、終期には HDG と LDG の差は殆どみられなかったが、中期において差がみられた。HDG では初期から中期にかけて、評定値は上昇しており、LDG ではセッション進行に伴い、上昇していた。

L-scale は FIGURE 4 のような結果を得た。従属変数にM値を用いた場合、初期、中期には HDG と LDG の差はみられなかったが、終期においての差がみられた。HDG はセッション進行に伴い、評定値が上昇していたが、LDG では終期に評定値が低下していた。

従属変数にP値を用いた場合は、初期では HDG と LDG の差はみられないが、中期、終期に差がみられた。HDG はセッション進行に伴い、評定値が上昇しているが、LDG では終期に評定値が落ち込んでいた。

F-scale は FIGURE 5 のような結果を得た。従属変数にM値を用いた場合、HDG と LDG の全般的な差がみられた。セッション進行に伴う変化は殆どみられなかった。

従属変数にP値を用いた場合も、HDG と LDG の全般的な差がみられた。セッション進行に伴う変化は殆どみられなかった。

次に (2) の結果を、スケール別にみていく。D-scale は FIGURE 6 のような結果を得た。従属変数にM値を用いた場合、初期、中期には HL と LL の差はみられなかったが、終期にはみられた。HL では、中期から終期にかけて評定値が上昇していたが、LL では、セッション進行に伴う変化は殆どみられなかった。

従属変数にP値を用いた場合も、初期、中期には HL と LL の差は殆どみられなかったが、終期にはみられた。HL では中期から終期にかけて評定値が上昇していたが、LL では、セッション進行に伴う変化はあまりみられなかった。

L-scale は FIGURE 7 のような結果を得た。従属変数にM値を用いた場合、初期、中期には HL と LL の差は殆どみられなかったが、終期にはみられた。HL ではセッション進行に伴い、評定値が上昇しており、LL では、中期から終期にかけて上昇していた。

従属変数にP値を用いた場合は、初期には HL と LL の差は殆どみられなかったが、中期、終期にはみられた。HL ではセッション進行に伴い、

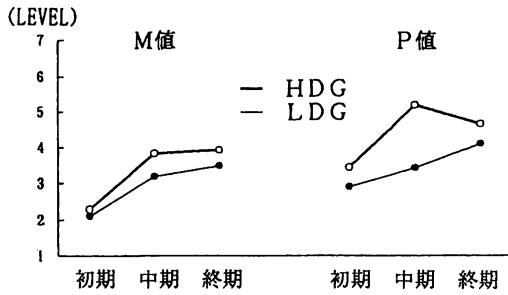


FIGURE 3 D スケール得点の変化  
(グループ展開度別)

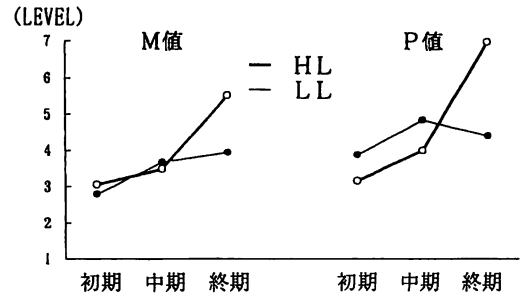


FIGURE 6 D スケール得点の変化  
(メンバー成長度別)

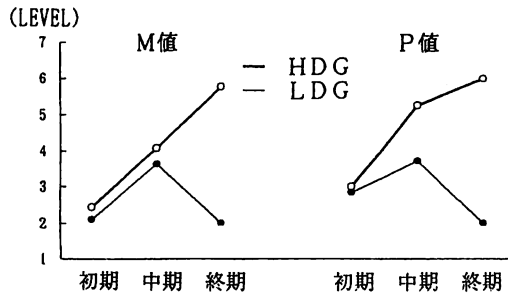


FIGURE 4 L スケール得点の変化  
(グループ展開度別)

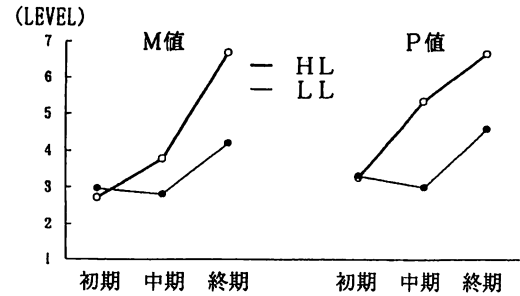


FIGURE 7 L スケール得点の変化  
(メンバー成長度別)

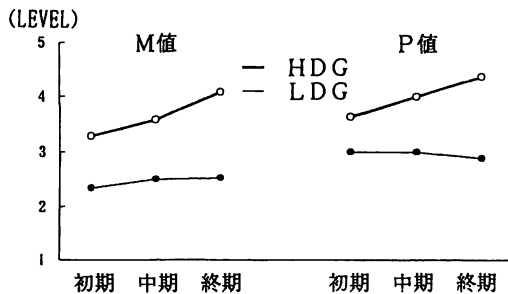


FIGURE 5 F スケール得点の変化  
(グループ展開度別)

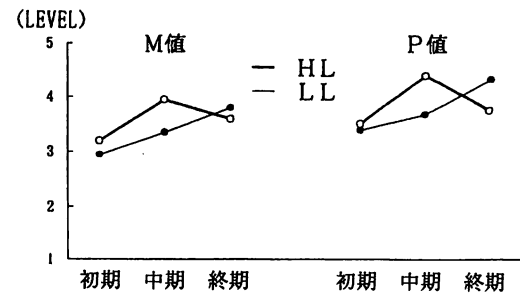


FIGURE 8 F スケール得点の変化  
(メンバー成長度別)

評定値が上昇しており、LLでは、LLでは、中期から終期にかけて上昇していた。

F-scale は FIGURE 8 のような結果を得た。従属変数にM値を用いた場合、HL と LL の差は殆どみられなかった。HL では中期に評定値が僅かに上昇していたが、大きな変化はみられなかった。LL では、セッション進行に伴い、僅かに上昇していた。

従属変数にP値を用いた場合も、HL と LL の差は殆どみられなかった。HL では中期に評定値が上昇していた。LL では、セッション進行に伴い、僅かに上昇していた。

#### 臨床家評定と SEAS との関連

申（1989）の追試として、心理的成長度を評定した17人中、SEAS 得点が得られた15人に関して、両者の関連を検討するため、相関係数を算出した。その結果、TABLE 6 のような結果を得た。これによると、SEAS の得点差における「率直な自己表現」「両極性の統合」と心理的成長度との間に正の相関（それぞれ、5%、10%水準）がみられた以外、関連性はみられなかった。

#### IV. 考 察

分析の結果を全般的な発言の傾向、全般的なグループ・プロセス、グループ・プロセスと効果との関連に考察する。ただし、本研究の対象は、坂中（1998）と重なるので、全般的な発言の傾向、

全般的なグループ・プロセスの結果と考察はほぼ重複する。これらについては事実確認にとどめる。

#### 全般的な発言の傾向

TABLE 5 より、グループ展開度が効果要因の時に主効果がみられ、下位検定の結果、傾聴発言よりも自己開示発言が多くなされることが示された。これは坂中（1998）と同様の結果である。メンバー成長度が効果要因の時のスケール主効果はみられなかったが、サンプル数は坂中（1998）の方が多く、基本的にはEGでは自己開示発言が多いと考えてもよいだろう。

#### 全般的なグループ・プロセス

発言頻度による分析では、セッション主効果がみられなかった。セッション進行に伴う発言頻度の変化はみられなかった。これも坂中（1998）の結果と同様である。

評定値による分析では、両群を平均すると、D-scale, L-scale のM値、P値共にセッション進行に伴い、評定値が上昇していた。F-scale についてはセッション進行に伴う変化はみられなかった。これも坂中（1998）と同様の結果である。

#### グループ・プロセスと効果との関連

グループ展開度別の分析 発言頻度による分析では、グループ展開度とグループ・プロセスの交互作用のみがみられた。下位検定の結果、HDGでは、初期よりも中期の発言頻度が多かった。これ

TABLE 6 SEAS と心理的成長度評定の相関（n=15）

	前	後	差
現在の自分の肯定	-0.15	0.07	0.29
達成志向	0.02	0.06	0.05
積極的に生きる	-0.23	0.09	0.37
自己主張	-0.11	0.01	0.23
率直な自己表現	-0.32	0.30	0.51 #
両極性の統合性	-0.24	0.09	0.50 #
独立	-0.10	-0.28	-0.21
強迫	-0.28	-0.11	0.25
自己志向	-0.04	0.20	0.29
弱点の受容	-0.01	0.20	0.18
総 合 点	-0.18	0.08	0.35

#: p<0.1    \*: p<0.05



は、初期には戸惑いからの沈黙やグループの方向性の模索で発言も少なかったが、中期に入ると活発に発言がなされた。そのことがグループの展開に関連しているを示しているといえよう。

評定値による分析では、D-scale のP 値で中期に、L-scale のM 値で終期に、P 値で中期、終期に、F-scale のM 値、P 値で全般的に HDG と LDG の差がみられた。いずれの場合も HDG が LDG に比べて高かった。

これらの結果より、HDG と LDG のグループ・プロセスを要約する。

HDG では、初期からメンバーは、他人の話を聴いて感じたことをフィードバックし、その後もこのコミュニケーションは維持される。中期になると、メンバーは自分の体験過程にふれながらの自己開示をはじめ、自己探索的な発言が増加する。聴く姿勢も話し手のメンバー自身の体験過程に焦点をあて、体験過程を促進するような明確化の発言で応答するようになる。終期では、メンバーは一層、話し手の体験過程を重視し、気づきや開けに関わっていく。

LDG では、初期からメンバーは、他人の話を聴いて感じたことをフィードバックするよりは、知的なアドバイスや自分の意見を述べる形で関わり、その後もこのコミュニケーションは維持される。中期になると、初期よりは自分の体験過程に近づくが、どちらかというと出来事中心の自己開示で感情は副次的に述べられるだけである。聴く姿勢も初期よりはやや話し手の体験過程に焦点をあてたものになってしまうが、自己開示と同様に、どちらかというと出来事に焦点をあてた聴き方にとどまる。終期では、感情や気持ちを中心に語り、今までよりも体験過程に近づくが、聴く姿勢は、知的な意見や考えに焦点をあてたものに戻る。

ここで、スケール別に再度結果を検討する。

D-scale は、中期に HDG と LDG の差がみられた。中期にメンバーが体験過程に一層近づき、自己探索的態度になっているかどうか、グループ展開に影響しているのではないかと考えられる。村山・野島(1977)の発展段階仮説でもグループが十分に展開している時には、メンバーに様々な気づきが生じると述べている。グループの展開にメンバーの自己探索的態度が影響しているといえよう。中期は、まさにグループが展開する時であり、この時に一層の体験過程の促進が起こるのは想像にかたくない。

L-scale は、中期以降に HDG と LDG の差がみられた。中期にメンバーが他のメンバーの体験過

程を尊重し、促進するような態度で関われるかが、グループ展開に影響しているのではないかと考えられる。このような関わり方をする中で、他のメンバーの体験過程を促進するのではなかろうか。自己開示と傾聴には密接な関係が予想され、この関係のさらに詳しい分析が課題として残る。

F-scale は、他のスケールと異なり、セッション進行に伴う変化がみられなかった。HDG では一貫して、メンバーの話や存在に対して感じたことがフィードバックされていたのに対し、LDG では一貫してメンバーの話に対して、知的な意見やアドバイス、冗談などがフィードバックされていた。この違いが、初期から現れていたことにより、後のグループ展開に大きな影響を与えているのではないかと考えられる。感じたことのフィードバックは、発言内容についての議論にならずに、自由に発言できるような関係を形成する。また、相手との心理的距離の近づきや受容的で親密な関係を形成する。逆に知的なフィードバックは、とくに発言内容についての議論になりやすく、体験から離れ、防衛的な関係を形成する。こういった関係では、相手との心理的距離の近づきや受容的で親密な関係は形成しにくい。この差は、体験過程の促進以前の、親密で自由な関係の形成がなされるかどうかの違いではなかろうか。グループに、メンバーが自分の体験に安心して触れていけるような受容的で親密で自由な雰囲気が形成されているかどうか、フィードバックの質的な違いとして現れていると考えられる。

以上をまとめると、グループが展開するかどうかは、グループが基本的に、受容的で親密で自由な雰囲気を保っているか、その上で、活発に発言がなされ、お互いの体験過程を尊重し、促進できるかに関係しているといえる。

**メンバー成長度別の分析** 発言頻度による分析では、HL と LL の差はみられなかった。

評定値による分析では、D-scale のM 値、P 値で終期において、L-scale のP 値で中期に、M 値、P 値で終期において、HL と LL の差がみられた。いずれの場合も HL が LL に比べて高かった。なお、F-scale では明確な差はみられなかった。

これらの結果より、HL と LL の個人プロセスを要約する。

HL は、初期では明確な特徴はみられないが、中期になると、他のメンバーの体験過程に焦点をあて、促進するような関わりへと変化してくる。終期には、その姿勢を一層、重視し、他のメンバーの気づきや開けに関わっていくとともに、自らの

気づきや開けの開示をするようになる。

LL は、初期では明確な特徴はみられず、中期でも、他のメンバーのどちらかという出来事に焦点をあてた関わりをする。終期には、体験や感情は語られるが、気づきや開けは語られず、聴く姿勢も以前よりは話し手の体験過程に焦点をあてているが、気づきや開けに焦点づけられることはない。

ここで、スケール別に再度結果を検討する。

D-scale は、終期に HL と LL の差がみられた。HL が終期に特に高まるのは、終期において体験過程に近づいた自己開示をするということで、急激に体験過程に触れた訳ではなかろう。終期は、体験を自分なりに振りかえる時期である。HL は EG での体験を振り返り、自分についての気づきや開けを語っていると考えられる。これは、体験なしには語られない発言であり、HL と LL の違いは、EG での体験の中で気づきや開けを体験しているかないかであろう。

L-scale は、中期、終期に HL と LL の差がみられた。ここで注目すべきなのは、中期に HL が他のメンバーの体験過程に焦点をあて、促進的に関わっていることである。なぜなら、D-scale では中期において LL との差がみられず、体験や感情を語るということがみられなかったからである。これは、HL は発言としては、他のメンバーの体験過程に焦点をあて、促進的に関わることを重視しているのではなかろうか。TABLE 3 の EG の効果の記述のなかに「他者理解・出会い」「自己受容・他者受容」という項目がある。また、TABLE 5 の心理的成長度評定の指標には「メンバーへの体験的な感想」「対人関係面での気づき」という項目がある。これからも分かるように、EG の効果は単に自分についての気づきが起きるだけでなく、対人関係面での気づきや他者理解の仕方の変化といったことが起きている。これはグループ特有の効果といえるかもしれないが、こういった変化は、セッション中に積極的に他者に関わることによって得られる。HL は、中期に他メンバーの体験過程に促進的に関わることにより、他者をよりよく理解し、共感性を養い、他者理解の仕方といったことを体験的に学習していると考えられる。さらに、そういった関わりの中で、自分の対人関係の持ち方や他者理解の体験が、積極的に自己の体験に意味づけられ、そこから気づきや開けが起きることも想像にかたくない。

F-scale は、明確な差はみられなかった。メンバーに対して何を感じるかに関心を持っていても、

それだけで、そのメンバーが成長するとはいえない。他のメンバーとの関係の中での体験が、自分の中に積極的に位置づけられない限り、成長には結びつかないのではなかろうか。単に感じたことをフィードバックするだけでは成長と結びつかない。むしろ、この種のフィードバックは、フィードバックされた側の成長と関係がありそうである。この視点からの分析は今後の課題である。

以上をまとめると、メンバーが心理的に成長するかどうかは、グループ内で何らかの気づきや開けを体験するとともに、セッション内で、積極的に他者に関わっていく中で他者理解の仕方や共感性を養っているかどうかに関係しているといえる。

### 発言の量的側面、質的側面と効果との関係

本研究は、発言を発言頻度という量的側面と評定値という質的側面から分析した。

量的側面からいえることは、HDG は中期に初期よりも多く発言がなされるということのみだった。グループ・プロセスやメンバー成長度といった効果要因と発言の量的側面の関連性はほとんどなかった。発言の質、体験の質というものが、効果と関連しているようである。

質的側面においても、より効果との関係がみられたのは P 値であった。M 値ではほとんど差がみられないことが多かった。これは、坂中 (1998) の EGIMS で高レベルに評定される発言は、一度されるだけでもメンバーやグループに与える影響は大きいという主張を支持するものである。それとともに、発言の質的側面の重要性も裏打ちする結果ともいえる。

### 臨床家評定と SEAS との関連

TABLE 6 から分かるように、臨床家評定と SEAS との関連は、参加前にくらべて参加後に、「率直な自己表現」「両極性の統合」ができるようになったか、においてのみ、正の相関がみられた。この結果は、申 (1989) の結果と主張を支持するものである。

### V. 今後の課題

本研究では、坂中 (1998) において今後の課題とされていた体験過程の視点からみた EG の相互作用プロセスと効果との関連を検討した。その結果、相互作用プロセスと効果との関連について、いくつかの仮説を提示することができた。今後は、対象を拡大し、多くの EG でこの仮説を検証して

ゆく必要があろう。また、本文中で述べた「自己開示と傾聴の関係」「フィードバックと、それを受けたメンバーの心理的成長の関係」といった問

題を明確にするためには、坂中（1998）で述べられているもう1つの課題、すなわち、具体的な相互作用の継時分析が必要であらう。

## 文 献

- Guilford, J.P. 1954 Psychometric Methods, New York: McGraw-Hill. (ギルフォード J.P. 秋重義治訳 1959 精神測定法 培風館)
- 吉良安之・田村隆一・岩重七重・大石英史・村山正治 1992 体験過程レベルの変化に影響を及ぼすセラピストの応答 — ロジャースのグロリアとの面接の分析から — 人間性心理学研究, 10(1), 77-90.
- Klein, M.H., Mathieu, P.L., Gendlin, E.T., & Kiesler, D.J. 1970 The Experiencing Scale: A Research and Training Manual. Volume I, the University of Wisconsin.
- 村山正治・樋口昌巳 1987 体験過程の促進からみたエンカウンター・グループ — 体験過程スケールによるエンカウンター・グループ過程の分析 — 人間性心理学研究, 5, 88-98.
- 村山正治・野島一彦 1977 エンカウンターグループ・プロセスの発展段階 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 21(2), 77-84.
- 村山正治・野島一彦・安倍恒久・岩井 力 1979 日本における集中的グループ経験研究の展望 実験社会心理学研究, 18(2), 139-152.
- 村山正治・山田裕章・峰松 修・冷川昭子・亀石圭志 1984 自己実現尺度で測る精神的健康(3) — 項目とフォームの決定 — 健康科学, 6, 45-57.
- 野島一彦 1982 エンカウンター・グループ・プロセス論 福岡大学人文論叢, 13(4), 891-928.
- 大塚 純 1999 教員の人間関係能力の向上をめざした研修のあり方に関する研究 — 研修型エンカウンター・グループの有効性の検討 — 鳴門教育大学大学院学校教育学研究科修士論文
- 坂中正義 1994 エンカウンター・グループ発言カテゴリーの作成とその検討 人間性心理学研究, 12(1), 46-61.
- 坂中正義 1998 体験過程の視点からみたエンカウンター・グループでの相互作用 — その測定の試み — 人間性心理学研究, 16(2), 146-158.
- 坂中正義・村山正治 1993 日本におけるエンカウンター・グループ研究の展望と今後の課題 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 38(2), 143-153.
- 申 栄治 1989 エンカウンター・グループにおけるリサーチの今後の方向性に関するいくつかの考察 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 34(1), 47-55.

付記：本研究は、著者が九州大学大学院教育学研究科に提出した修士論文（1995）の一部を加筆、修正したものである。

修士論文作成にあたり、御指導頂いた九州大学教育学部（現東亜大学大学院総合学術研究科）村山正治教授に謝意を表します。さらに著者と一緒に過ごして下さった EG 参加者の皆さんとファシリテーターの先生方にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。